

第2回 京都駅前の再生に係る有識者会議 会議録

日時 令和7年6月16日（月）17時から19時まで

場所 京都市役所 分庁舎第1会議室

出席 岩瀬 諒子 京都大学大学院工学研究科助教
大庭 哲治 京都大学経営管理大学院教授
加須屋 明子 京都市立芸術大学美術学部教授
嘉名 光市 大阪公立大学大学院工学研究科教授
松中 亮治 京都大学大学院工学研究科准教授
若林 靖永 佛教大学社会学部教授

以上6名（五十音順、敬称略）

1 開会

2 議事等

○ 資料説明

（資料1「1. はじめに」の説明）

（質問・意見なし）

○ 資料説明

（資料1「2. 京都駅前再生に向けたコンセプト・必要な機能等」の説明）

○ 大庭座長

コンセプト、実現のための必要な機能、関連する事例などの紹介があった。論点として、コンセプトはどうあるべきか、駅前に必要な機能等はなにか、という点について、議論をしたい。

○ 若林委員

今年、2030年に向けた京都市の観光振興に関する審議会をやっている。その委員の方々から、京都が大事にする価値・本質は何かという問いが出ている。その問いは大事で、真摯に受け止めるべきもの。ただ、百人いれば百通りの京都の価値・面白さがあって然るべき。かつ、過去・現在・未来と京都らしいといわれるものには、最近のもあれば、室町時代のものもある。お祭りも江戸時代や平安時代に遡るものもある。そういう意味では、京都はこうだと固執することはできないと考えたほうが良い。

一方で、京都市民や、国内・国外から観光や仕事で京都を訪れる人にとって、交通ルートとして京都駅が入口・出口になっているため、京都駅を出た時に京都に来たと感じる必要がある。ただ見せ方がうまくないと、テーマパーク化やイメージの固定化になってしまう。駅前の諸機能がバランスよく展開されていることは前提として、京都駅前を出たら、コンパクトでもよいので過去・未来を展望できる、例えば庭園空間のようなものがある、一目でここは他に無い場所だという空間を提供できるかが重要。コストなど検討すべき事項は多くあるが、思い切って京都の未来に残すものを考えたい。機能の議論などが進み、場所がないことや、お金がないことなど、できない理由を挙げはじめるとできなくなってしまうので、コンセプトの段階で問題提起をしたい。

○ 大庭座長

コンセプトについて、京都らしさの重要性がまず挙げられている。また、京都の歴史性と現代の革新性を併せ持つという点、尊重した街並みの創出などの価値も挙げられ、それらに繋がるご意見であった。

○ 松中委員

まず、コンセプトについて、京都らしさは非常に重要であるが、すべての人にとっての京都らしさを作ること、見つけることは非常に難しい。それぞれの立場で京都らしさを持っており、それを前提に考える必要がある。ただ、何を作っても京都らしい駅前になるのではないため、いずれかの段階で、どういう観点のどのタイプの京都らしさを京都駅前で重視していくのか。京都駅前で大切にしたい京都らしさは、これであるということ、できるだけ具体的に示していくことが必要。単に京都らしさ・京都らしい駅前再生だけで議論すると、空中分解するおそれがある。今の段階で固められるものではないが、必要な機能・駅前の役割・再生の方向性などを議論していく中で、京都らしさの観点で、大切にしたい部分は何かという考え方で議論をしていくのがよいと考える。

京都らしさを感じられる空間として、歴史性と革新性が挙げられているが、相反する部分もある。京都駅前はその融合を目指すのか、どちらかに重きを置くのかなどの認識を共有し、議論をしていくのがよい。

機能については、資料に記載の機能は、全てであるとよいと考えられる。京都らしさを踏まえて、限られた空間にどの機能を優先的に配置していくのかという議論になる。多様な機能が求められるが、コンセプト・方針に基づいて重点的な機能を考える必要がある。

○ 大庭座長

京都らしさと一概に言っても、いろいろな京都らしさがあるということ、あわせて、どういうタイプの京都らしさに注目するのか、という点が重要である。また、機能も様々あり、コンセプトに応じてどういう機能を優先するかということが重要とのご意見であった。

○ 嘉名委員

京都らしさで述べると、資料に挙げられているものは、京都らしさの骨子になるだろう。これらの方向性をクリアに決めていくべき。また、ステークホルダーが多くおられるので、それらの方々との議論を踏まえて最終的に決めていくことになると思う。

事例の紹介として、大阪駅周辺はイノベーションという言葉を多用している。イノベーションが生み出されるような街・活動をどのように誘発していくのかをコンセプトにしている。また、東京の大丸有は、クリエイティブ・インタラクションというキーワードを出している。大丸有は28万人の就業者のまちであったが、サービス・レベルを向上させ、100万人の人が訪れるまちになり、より多様な交流が起きることを目指している。渋谷では、Bunkamura などエンタメ関連のものや、渋谷駅周辺再整備の中で、情報系に重点をおいたビットバレーなど特定の産業を重視し、今に至っている。さらに、渋谷は周辺の市街地の個性的なまちとつなぐことで、多様な交流を生み出していく観点もあり、今まで出会わなかったものが出会うことにより、新しい創造性・イノベーションが生まれるといったことを大きなコンセプトにしている。

そこで京都がどういう特徴を見いだすか。ひとつには、京阪神連携の話を出してはどうか。大阪も一定整備されてきた。神戸も現在積極的に取り組まれている。それぞれ個性があり、京都が同じようなものをダウンサイジングして再生しても、イノベティブでもクリエイティブでもない。むしろ、お互いが呼応しあい、京都は京都の強みが出てくるのが重要。京阪神でも、世界的知名度が高いのは京都であり、国際競争力や、世界に伍するという点では、京都のブランドを最大限使える。国際的な視野を持つなど、京阪神連携の中で、さらに大きなイノベーションを生み出すけん引装置としての京都駅前が考えられる。

景観について、東京駅前に行幸通りができ、ここが東京だという顔になる景色ができた。それに皆が驚いた。京都駅に降り立った時に、そういった景色をつくる必要があるのではないかと改めて感じる。機能については後ほどの議論になるが、京都はボリュームが無尽蔵ではないという点も、他都市と違う点。大阪駅前には容積率1800%など多くあり、必要な機能を上に積んでいくことが可能だが、京都はそういうわけにはいかない。どういう機能を導入するか吟味

する必要もあり、また、周辺の街とどう繋がるかという点では、都市を水平に展開していくことが必要で、これも他都市と違う点である。

○ 大庭座長

京阪神の連携の必要性、その観点から京都の強みを伸ばす方向性があるというご意見であった。国際競争力、知名度は抜群である。それを活かす点は、まさに京都らしさといえる。一方、空間制約があるということで、どの機能を重視して配置していくのか、というご意見であった。

○ 加須屋委員

京都の顔をつくることを目指すべき。京都らしさは難しいが、例えば、二条城でアンゼラム・キーファー展が開催された。もともと素晴らしい空間に現代の芸術が入り込むことで話題になった。歴史と革新の融合という意味で、そういったものを現代作家が活用するといったかたちなどで、京都らしさにつながるとよい。

京都駅前だけに集中するのではなく、横の広がり、特に南北の繋がりなど、これをきっかけに広がりを持たせることが大切。

また、ヒューマンスケールなまちとすべきで、大都市の駅前と同じようなものができるのは意味がない。人が楽しく集える空間、観光客がほっとする気持ちになる、魂が落ち着くような素敵な場所が望ましい。イメージをつくりあげたうえで、機能を議論することが重要である。

○ 大庭座長

周辺エリアとの連携が重要で、とりわけ南部との繋がりを重視するかというご意見、また、空間をどのようにヒューマンスケールで人が利用・活用するものにしていくのかというご意見であった。

○ 岩瀬委員

コンセプトについて、前回会議の各委員の意見がまとめられており、共感できるものである。一方で、強いメッセージ性が足りない。また、京都らしさについては、対外的な京都らしさという点と、京都の中での京都駅周辺の京都らしさという点の両方があると考え。外に向けての京都らしさは、先ほど国際性という話があったが、その文脈で時代をリードするような斬新なコンセプトを考えたほうがカッコいい。京都がそれをやってきたかと、皆がハッとするような、京都だからこそできるコンセプトになるとよい。

ワードとして、多様なものがバラバラで、対比できるという多様性という点、

庭というテーマは京都らしい考えのひとつでもあり、現代性も取り入れられる。エコロジカルという視点もある。また、京都は小ささ・大きさ、いろいろなものがあり、スケールの話もある。防災もある意味で京都らしさでもある。

コンセプトは、今の段階では明確にはならないが、コンセプトが実現されたときの空間のデザインが説得力に繋がる。

つまり、こういったものを束ねるような強いメッセージ、実現する具体的なデザイン、推進力となるビジュアルが重要と考える。

○ 大庭座長

強いメッセージ性が必要という点、京都の内・外の視点の両方から見る必要性があるという点、また、グリーンやエコロジカルという視点などのご意見であり、改めて気づかされた面も多い。また、推進力が必要であるというご意見もいただいた。

各委員の方々から、様々な視点でご意見をいただいた。非常に難しい、議論が尽きないテーマではある。京都駅前の再生に向けて、コンセプトは現時点で、これというものを決めづらいものではあるが、資料に記載のあるコンセプトも概ね外れていないとも考える。一方で、その強弱があり、具体的なメッセージ性が求められる。今後、機能面なども議論するなかで、コンセプトの議論と往復しながら、より具体化していくこととしたい。

○ 若林委員

庭をどう捉えるかを巡っても、いろいろな議論ができる。庭はそれぞれの国・地域の文化、精神性、技術の積み重ねにより生まれるもの。日本・京都の未来に向かって創造的な議論ができるとよい。基本的には、緑地があり、四季の変化を感じることができる。また、見立ての精神性、固定的でなく移ろいゆくものの面白さもある。茶会などのイベントができるような空間があれば、駅前がそういったゾーンになる。これは国際性等と矛盾するものでなく、逆に京都が大事にしているものを表現することが、京都のクリエイティビティにつながる。「クリエイティビティ」はどの都市も挙げるテーマ。一つのアイデアとして「庭」といったものをコンセプト、あるいはデザインの軸に位置付けることで、京都ならではのものが見えてくるのではないかと。

○ 大庭座長

変化・フレキシビリティといった様々なものに対応できる空間のあり方というものが必要と考えた。また、様々な都市で「クリエイティビティ」をメッセージとして街づくりが展開されている。京都らしさの議論は難しいものだが、

京都らしいクリエイティビティ・イノベーションは何かをあわせて考えていく必要がある。

○ 嘉名委員

「庭」は、「ニハ」とも書く。「ハ」は「庭」、これは「バ」とも呼び、プレイス（場）の意味があり、市場などの人が集まる場、自然共生、里山など生活と切り離せない場など、多義的な意味を含んでいる。「庭」というキーワードから、京都の庭とはなにかという読み解きも興味深い。

○ 大庭座長

コンセプトについては、大きな方向性は概ね共感いただいている。また、機能については、優先順位を含め、コンセプトに適した機能はどうあるべきかという点、それを限られた空間の中で、どう作り上げていくか、という点は今後も議論が必要。

続いて、コンセプトの実現に向けた方策についての議論に移る。まずひとつめの、多様な都市機能の集積について、事務局から説明いただきたい。

○ 資料説明

（資料1「3. 1 多様な都市機能の集積」の説明）

○ 大庭座長

多様な都市機能の集積を図るため、必要な方策は何か、とりわけ都市計画の再考や、誘導策が必要ではないか、その際、何に留意すべきかといった点を議論したい。

○ 若林委員

オフィスについては、コロナ禍を経た働き方の変化や生成AIの出現により、多くの人々がひとつの部屋で事務作業するといった場所は、ほとんど要らなくなる。スマホやタブレットで済んでしまい、生成AIに投げれば、自動的にまとめてくれたりする。人が集まるオフィスの役割は、対話・コラボレーションなど、リアルな人間と人間がぶつかり合って何かを生み出す場としての空間、交流の場になるので、オフィスの使い方は大きく変わる。

一方、京都に一定のオフィス需要があり、その割に供給が足りないという点は、無視できない。しかし、容積率の消化割合をみると、京都駅の南側はそこまで消化していない。また、四条烏丸・御池・五条などは、十分とまでは言えないものの、オフィス街として一定のまとまりがあり供給されてきたエリアで

はある。京都駅前の特に北側にオフィスを大事に考える必要があるのかを、そもそも考える必要がある。京都駅南部を全体として産業・イノベーションゾーンとして展開しようとするのは、古くからの京都市の大きな都市計画の考え方もある。そのようなことも踏まえ、京都駅前のオフィスという問題の立て方が必要かどうか、大事なのかということの問題提起したい。

○ 大庭座長

オフィスのあり方も変わっているというご意見、また、オフィス需要に応える供給場所が京都駅北側か南側かというご意見であった。

○ 松中委員

オフィスとはなんぞやということから、考える必要がある。いわゆる従来型のオフィスが京都駅前に必要なのか、あるいはその集積が京都らしいのかは、考える必要がある。資料では、「時代の潮流に沿ったオフィス空間」と記載がある。これがどういったものかという点もあるが、従来型のオフィス空間ではなく、いろいろな人たちが自由に集まり、顔を合わせて議論をし、クリエイティブな話がされる場であると考え。また、駅前の貸しオフィスやカフェといった仕事ができる空間を供給する、そういうものを含めてオフィスということで、京都駅前で京都らしく提供するという方向性を考えていく必要がある。

一方で、オフィスに限らず色々な機能を駅前で集積していく、また、南北をいかに結んでいくかも大事で、南北を一体的に考えていく必要がある。南側は容積消化率が50%に満たない敷地も散見されるが、北側はほぼ75%を超えている。建物高さに関しても、31mを超える高さも現状あるという状況。

多様な機能を集積・融合・連携させ、京都らしい駅前の実現を目指すのであれば、機能の割り振り、配分に加え、全体的なキャパシティを高めるという方向性を検討する必要がある。また、インセンティブの観点では高さ規制で建てられる床面積は限られるなか、どう採算をとるかを考えると、ある程度の規模の床を供給しないと事業採算に合わない。その解決が目的ではないものの、駅前全体として、キャパシティを増やし、いろいろな機能をよりよく・効率的に融合させていくことも重要な点である。

留意点として、駅前だけで考えるのではなく、周辺からの見え方などの影響、駅ビル・京都タワーといったランドマークとの関係性を考慮したうえで、キャパシティの拡大を検討する必要がある。可能であれば、地下空間の活用もしたほうがよいが、難しいと聞いており、いかに上の方向に伸ばしていくことができるのか。無限ではないが、少しでも空間を確保し、計画の自由度を高めることが重要と考える。

○ 大庭座長

現代に求められるオフィスのあり方という点に留意する必要があるというご意見、また、土地利用・容積率・高さの現状から効率化を図るとともに、キャパシティを高められる部分について、高めていく必要があるのではないかというご意見をいただいた。とりわけ、地下は課題が多いため上方向に向かってキャパシティを高めることも一つの案としてご意見をいただいた。地下空間は課題が多いということはお聞きしているが、一方、国民保護法などで、地下空間や地下施設が重要という話もある。地下のあり方も考えておく必要がある。空間的な制約があり、それに対して考えていく必要があると、改めて認識した。

○ 嘉名委員

前提として、オフィスだけではいけない、オフィスさえ供給すれば都市再生が可能という話ではないという前提で、考える必要がある。

最近の傾向として、デベロッパーの方へヒアリングするとわかるが、大フロアのオフィス床でないとならぬ価値が出てこない。大阪・御堂筋は碁盤の目であり、街区が80m×80mである。一街区にひとつのビルが建ったとしても、6,400平米にしかない。数千平米の床がワンフロアにあり、そこでいろいろなコミュニケーションが起き、イノベーションが起きることを考えると、やはり大フロアは重要である。そういった点で、実現が可能な場所はどこかという視点は必要である。神戸市では、庁舎敷地で庁舎の建て替えとオフィスを合築している。これは、他でこの規模の敷地が確保できないからという側面がある。競争力、市場力の高いオフィスを提供する必要があり、小さいオフィスビルを多く作ってもいけないということである。

また、見落としがちだが、商業地域の中で、最も床を稼いでいる用途は、住宅である。商業地域であるが、最も需要があるのが住宅になる。住宅、要するにマンションだが、デベロッパー側の事業スキームとして、オフィス・ホテルなどもあるが、マンションが一番事業スキームとして組み立てやすく、建設コストが回収できる用途である。そうすると、マンションを作りたいという話が出てくる可能性が高い。それを許容していくのかを考える必要がある。神戸は、特別用途地区を活用して都心部でマンション規制を行い、オフィス供給できる場所には住宅は建たないようにするという考え方。また、横浜市の関内でも同様のことを行っている。商業地域は、ほぼすべての用途が建築可能であり、住宅をどうしていくかを検討する必要がある。

機能面では、新たな機能を入れようとするが、最も重要なのは、既存の機能の更新、どのように機能をアップデートするかである。駅周辺の既存のものは、

イノベーションの糧になる。その機能をアップデートしていくことが必要。建物が老朽化しており、建物更新の際に流出してしまうことがないようにすることが重要である。東京の大丸有は100年計画で、テナントが流出しないようにしている。

建設費の高騰について、都市再生特措法の改正を国土交通省で検討しているところであるが、ストック活用の話をよく聞く。新築による機能強化だけでは、難しくなってきた。東京でも、事業採算があわないという話が出始めており、既存ストック活用をうまく織り交ぜたところが、京都らしさにも繋がる。京町家保全や、近代建築の保存・活用などうまくかみ合わせるといった、京都らしいスキームも一つの方法と考える。

他都市では、ホールやアリーナなど大規模なものを都市再生の拠点にするケースがある。京都は駅前に大規模なものがないが、導入すると大きなボリュームを占めることになる。オフィス、文化施設など挙げられている機能以外のものについて、議論をするなら今しておかないと、あとから追加することは難しいものになる。

○ 大庭座長

オフィスだけではいけないという重要なお意見があった。また、オフィス・商業・コワーキング・貸し会議室など、いろいろなものが足りないことはデータとして示されている。それらを単に供給するだけではいけない。また、実現できる場所を見定めるという視点と、既存ストックをどう有効活用するか、アップデートするか、という視点。京都らしいともいえる、まさに保全を都市再生に結び付けて考えていくことが重要。また、導入すべき新しい機能を考えるなら今であるといったご意見であった。

○ 加須屋委員

オフィス需要があるが、既存の多くが昭和初期のものであり、それを建て直すときに競争力が高まる形のものにできるかというところを考えることが必要。

コワーキングスペースや、貸し会議室が意外と少ない。商業施設も一定あると思っていたが、通りに面しているものが少ないということが、歩く場所として楽しくないことに繋がっている。現状の公園なども利用しつつ、全体で考えることが重要である。

ホールは巨大なものはないが、小さいものなど一定はある。認識されていないこともありうるので、それらを結び付けて、まとまった発信も必要。

また、町家保全、更新補助が誘導策につながるのではないかと。あるものを残

しながら、新たな空間を作っていくことが難しいけれどポイントになる。

○ 大庭座長

文化芸術施設や大学など、どのように点在しているかは、データで示された。一方、オープンスペースなど、知っているが、使いにくいものなどがある。施設間の連携や情報発信も大事であるというご意見であった。

また、更新に当たってのいろいろな補助について、保全を図ることも併せて考えることが必要というご意見であった。

○ 岩瀬委員

大学に籍をおきつつ、設計事務所を主宰している立場からオフィスを考えてみると、これまで京都駅前にオフィスを構えたいと考えたことがなかった。ターゲットは多くの従業員を構えているものがメインになるかと感じた。また、文化芸術をターゲットにしたときに、オフィスというよりアトリエと呼ばれるようなものをどのように考えるのかも重要である。

知人の中では最近京都に移住する人が多く、芸術関係の人が多し。京都にアトリエを持ちたいというモチベーションがある。そういう人がオフィスを借りることや、スタートアップ・若者が借りやすい環境をどうするか。

文化庁移転の話とも大きくは連動しているのではないか。文化芸術に着目することで、いわゆる駅前のオフィス街とならない、京都らしさがでてくるのではないか。

既存施設について、認知されていないという課題もある。閉じられた空間で、顔や活動がみえてこない、開かれた作られ方がよい。情報発信として、プラットフォームがあるとよい。

大きいことと小さいことが共存する状況をどうつくるかが重要である。

○ 大庭座長

オフィスに関して、いわゆる事務所というものではなく、アトリエ、スタートアップといったイノベーションを引き出すような主体も集うことができる空間・オフィスが求められているというご意見であった。また、顔や活動が見えにくい・認知されていないというご意見もあった。

各委員からご意見をいただいたが、当方からも1点述べたい。建物の更新を図る際、デベロッパーの行動原理を理解する必要がある。どういう環境を整備すれば京都駅前の更新・保全をしてくれるのか。それが何か、都市計画上の障壁、具体的な誘導策を正に議論いただきたい点である。これならば乗ってもらえるという話や、ボリュームを緩める、キャパを高めるという議論を今後して

いく必要がある。

○ 嘉名委員

上に伸ばすことができないのであれば、地下を増やすことも、ひとつの考え方。御堂筋は百尺制限をしていた時代は、地下の有効活用もあり、そこで容積を稼ぐことをしていた。ただ、コストが非常にかかることもあり、どこまでやるかという点で、地下の床に価値を持たせる工夫が必要である。京都駅前には地下街があるが、沿道のビルに直接アクセスできる構造ではない。札幌市ではチ・カ・ホとして地下の歩行者空間ができ、沿道にビルが建っているが、更新により直接アクセスできるように作っている。都市計画的にも構造的にもそのようにしておく、建物更新により地下空間の価値が高まる。中長期的に都市計画の展望を見据えておくことで、価値向上に繋がる。

○ 大庭座長

地下空間と地上のリンクをしっかりと作る点、それが地下の価値向上につながり、地上の価値を高めることにも繋がるといったご意見であった。

○ 事務局

更新に当たっての民間事業者の考えについては、今後、ヒアリングの場を設けたいと考えている。

ホールについて、駅前にはいろいろな人が集まる MICE 機能が必要だが、敷地規模など、大規模な施設が整備できる状況にはない。一定の MICE 需要に応えられるものは整備しながら、大規模なものは市内の他の会場との連携が現実的と考えている。

○ 大庭座長

この議題について、各委員からご意見をいただいた。次の論点について、事務局から説明いただきたい。

○ 事務局

(資料1「3.2 ウォーカブルなまちの実現」の説明)

○ 大庭座長

ウォーカブルなまちの実現ということで、実現方策として必要なことはなにかという観点で短期・中長期それぞれの視点から例なども挙げて説明があった。

○ 若林委員

庭というデザインの空間を用意すれば、必然ウォークアブルな場所になる。一方で、屋外空間は台風や、猛暑などの影響が多くなるため、ウォークアブルの議論をする際は、レジリエンス・逃げる理論をどう考えるかを、あわせて検討する必要がある。

○ 大庭座長

レジリエンスの視点、常時・非常時の両方の視点から、ウォークアブルな空間のあり方についてのご意見であった。

○ 松中委員

ウォークアブルの実現には、歩ける場所・空間を供給することが第一である。現状で、それが不足しているのであれば、その供給が必要となる。また、単に歩くだけでなく、溜まる・憩う空間なども含めてウォークアブルとしているので、そういった空間を限られたスペースから生み出す方向を検討することになる。

歩く空間だけを用意すれば、ウォークアブルということだけでなく、周辺の立地している建物の内部も含め、歩いて楽しく過ごせるような工夫が必要である。

短期・中長期の取組があるが、短期的には、既存の広場空間をいかに有効活用するか、効率性を高めるか、ということをつとづつ取り組むことが必要。

バス・タクシー関連のスペースは、およそ2：1の割合となっている。これを実際の利用している方の数、利用されている時間を踏まえて、この割合が良いかも検討する必要がある。タクシーの乗降のための空間はそこまで広くなく、お客さんを待っているタクシーが停まっている空間が多くを占めている、それぞれの空間がどのように使われているかということまで踏み込んで、細部を考えていく必要がある。

地下接続について、ウォークアブルなまちのためには、地下のウォークアビリティを高めて、地上との接続を考えることが重要。地下街と建物の地下接続を考える必要がある。建物を更新し、建物地下と地下街を結ぶとなると、制約があり、いろいろ大変ではある。様々な基準を踏まえながら、建物更新の際に、地下街を少し拡張し、建物に迎えに行くかたちにするのを、今から考えていく必要がある。

○ 大庭座長

歩く、溜まる、憩うといったウォークアブルな空間をどのように供給するのか、空間の使い方を検証していく必要がある、地下接続は制約などあるが考えていくべき、といったご意見であった。

○ 嘉名委員

駅の話になるが、駅の出入口に人流が集中しており、混雑につながっていることがわかる。デッキレベル・地上レベル・地下レベルで、中長期的に駅の中からの人流を、どう分散させるか検討が必要である。鉄道事業者との協議も必要になる。

環境空間比が少ない点については、他都市のいろいろな駅前では、顔となるような、居心地のよい駅前広場づくりを進めているなかで、一つの目安として空間比の向上も考慮しており、それも重要。

歩きたくなる・滞留については、点としての駅前広場でなく、面的に広がり考える必要がある。ストリートデザインなどを含め回遊性を高める視点も重要である。

御堂筋は、歩道と車道の割合を、1：2から2：1に逆転させた。交通上の支障が起きないように、信号の位置調整や右左折レーンの設置など社会実験を重ねながら進めていた。駅前の歩車の役割分担の検討も必要である。

地下街の出入口が歩道上にあることも、ウォークブルにならない要因となる。例えば、歩道上の地下出入口が更新された建物にビルトインされることで、大きく変わる。

歩道の下は、地下埋設物が多いため、地下のアクセス性向上は課題が多い。インフラの計画的な更新の必要性は理解されているはずなので、それとあわせて考えていく必要がある。

トランジットモール化や、歩行者空間の大幅拡大などの将来像を思い切って描いてみてはどうか。そういったものを打ち出して、短期・中長期それぞれで、いろいろな議論・対話をしていくことが大事ではないか。

○ 大庭座長

歩行者の分散や、歩行者空間を点から面へという形で展開するというご意見であった。資料にも記載があるが、短期・中長期の視点をもって取り組んでいくべきというご意見であった。

○ 加須屋委員

現状、広場が狭く緑が少ない。庭、ということで考えると、緑もだが、雨よけになる大きな樹木や、あずまや・ベンチなども必要で、そういったものがあることで、巡っていく楽しみが生まれていく。

地下との出入りについて、塩小路の歩道に階段しかないことはバリアフリーの観点からも課題である。ビルと繋げることや、拡張などにより、地下空間が

生きてくるので、今後の課題である。

建物について、軒・庇など、京芸はテラスのような大学ということコンセプトに、様々な工夫がなされているが、そうした軒先やテラスのようなイメージ、お店の側でも提供し共有できるような、雨よけになるようなスペースにより、歩きやすさに繋がるデザインに今後なっていくと、もっと楽しくなる。全体で考えることで、すぐには難しいが、その方向を目指しながらできることから取り組んでいくことになる。

○ 大庭座長

地下での接続や、共有スペース・テラスといった安全で、楽しく、潤いのある空間をどう確保するかが重要であるというご意見であった。

○ 岩瀬委員

アイレベルの抜けをどのようにつくるかは重要な点。歩くときに、歩いていく先に何が見えるのか。また、滞在できる場所から別の滞在できる場所へと繋ぐ街路のようなものがあるとよい。

現在の広場は最初にバスターミナル、タクシープールが計画され、余ったところに人の居場所がある印象を受ける。交通動線の整理がどこまでできるかによるが、どのような抜けを作るか、並行して考えることが必要である。

○ 大庭座長

各委員からご意見をいただいた。当方からも2点、述べたい。

空間をどう利用するか、使い方を確認する必要がある。資料で広場内の滞留できる空間が明示されているが、滞留してもらいたい・しやすい空間があるのかという視点も重要。また、デッドスペースもある。それらの活用の視点も必要となる。

また、周辺の建築物の駐車場のあり方をコントロールする必要がある。このエリアは、駐車場整備地区に指定されている。四条通近傍の市内中心部は、同じ駐車場整備地区であっても、より抑制のコントロールが効いているエリアになっている。京都駅前も、そのようなエリアではなかったと認識しているが、どうか。

○ 事務局

付置義務台数等の扱いは京都駅前も同様であるが、四条通、烏丸通、御池通、河原町通に囲まれた歴史的都心地区では隔地駐車場の設置についても抑制されており、その点は異なる。

○ 大庭座長

そのような抑制的なエリア指定の位置づけや、駐車場の集約化の検討など、歩行者目線からの駐車場のあり方を検討する必要がある。

各委員の方から、資料に記載の内容に通じるご意見を多くいただいた。一方で、現状の確認も大事であるといった視点のご意見もいただいた。

次の論点について、事務局から説明いただきたい。

○ 事務局

(資料1「3.3 京都らしい駅前や建物デザイン」の説明)

○ 大庭座長

デザイン・景観について大きな方向性を議論いただきたい。

○ 嘉名委員

他事例の紹介もあったが、ガイドラインのようなもので、緩やかに大きな方向性として作ることになると考える。

京都駅に降り立った時に、烏丸通が目の前にビスタで見えるわけではない。塩小路通の北側の建物が見える。この見え方は、いわゆるターミナルビスタというもので、建物と広場からの見え方で、空間構成・景観構成する考え方が必要である。

塩小路通も、東西のストリートとして、いかに魅力的にするかという考え方が必要。

広場そのもののあり方、交通広場のリニューアルとして、人中心の機能が入ってくるのであれば、駅ビルとの関係性をどう持たせるのかもポイントになる。

また、京都は路地など私有地をうまく通って、賢くウォークブルな空間を実現している。例えば建物内を通り抜けられることも一つの例である。動脈のような幹線を考えることも大事だが、毛細血管のようなものを繋げていくことも、京都らしいウォークブルとなり、景観面にも繋がる。そういった京都らしいウォークブルの景観をつくる要素をいくつか挙げて、それで敷地分析をしていくとよい。

○ 大庭座長

景観のありようについてご意見いただいた。また、路地・私有地の活用などウォークブルにも景観づくりにも繋がる視点をいただいた。

○ 松中委員

景観ということ、見え方の話ではあるが、広場に面する建物、その近隣のものの低層部をどう使うのか、機能面も考える必要がある。低層部は人中心に考えると、駅を降りてそのまま歩いて入ることができる場所であり、そこが賑わいの元になるものか、あるいは回遊・移動のための空間として活用するパブリックスペース的な方向性かを考えて、それがどう見えてくるのかが、デザインを考えるうえで必要な視点ではないか。

今後、京都らしいデザインが議論されていくが、どういう点が京都らしいのかというストーリーと合わせて説明ができると、理解しやすく、市民へ説明するうえでも重要である。

○ 大庭座長

低層部のありようと、ストーリー性の確保、説明ができるデザインが大事というご意見であった。

○ 若林委員

コンセプトの議論などで庭といっているが、機能面でいうと、フェスティバル・イベントといったものができる公共空間が京都駅前にあるとよい。これ以上の人の集中の是非はあるかもしれないが、岡崎公園のような、市民が集まるイベントが行われているような空間を、建物でなく公開の公園的なエリアで用意できると楽しい。

ヨーロッパでは、伝統的にクリスマスの時期に、クリスマスマーケットが開催され、観光客にとっても楽しい場所になっている。そういうエリアが、庭のコンセプトの延長線上になる。街並みのデザインや文化的ゾーンをどうするかという議論をするときも、そのような機能を位置付けられるとよいと考える。

○ 大庭座長

祝祭空間などともいうが、そういったものや、人と空間がどう連携しながら場を作るかという都市共創デザインの視点からのご意見であった。

○ 加須屋委員

駅前の広場、公共空間などを作る場合、野外での展示やフェスティバル的なものが開かれることは、とても良いこと。街並みを特徴づける建物が点在していることもうまく活用し、京都らしさがどういうものかを考えながら、既存のものを活かしつつ、繋げていくことがよいのではないか。

また、人が集えて楽しいことは、祝祭のときだけでなく、日常的に集まり、

居たくなる魅力的な場所であってもほしい。そのためにもどのようなものが必要を議論していくことになる。

○ 大庭座長

人が集える空間、交流できる空間をどのようにデザインしていくか、というご意見であった。

○ 岩瀬委員

京都らしい駅前ということで、既存の価値ある建物がこれだけあるが、それが認識されていないということが課題である。そういった建物を認識できるよう、場として全体を整えることが大事である。

また、毛細血管で街と面的につながるといった話があったが、京都駅の空間構成も、階段が居場所化するなど、立体的に体験が繋がっていくようになっている。既存の建物や地下空間とのつながりを生かして、最小限の手数で連続的に繋がる豊かな街の体験をデザインするということが大事ではないか。面的には広いが、実際には線的に行動する人が多い場所であり、有効ではないか。

○ 大庭座長

体験や空間の面的な空間の繋がりをどう形成するか、というご意見であった。

それぞれの論点について議論いただいた。振り返ると、コンセプトは概ね同じ方向を向いているような形でのご意見をいただいた。多様な機能については、まだ議論の余地があり、新しい機能を含めるのかというご意見もあり、引き続き議論を進めたい。

最後に、ご意見・ご質問などあればいただきたい。

○ 松中委員

資料の写真は全て昼間のものである。夜の街並みのことを考えてきていなかったことに気づいた。夜の京都駅のあり方も加えて議論する必要がある。

○ 大庭座長

最後に今後のスケジュールについて、事務局から説明いただきたい。

○ 今後のスケジュール

(説明)

3 閉会